

- 1 派遣期日 平成 29 年 8 月 4 日 (金)
- 2 研修先 学校名 (会場名) 上智大学 (上智大学図書館 8 階 L-821)
所在地 東京都千代田区紀尾井町 7-1
<http://www.sophia.ac.jp/>
- 3 研修内容 CLIL Workshop for Junior High School Teacher

(1) ワークショップ 1 CLIL の理論と実践 (基本)

言語習得の視点から、「使える英語」学習を展開する方法を考えている。

・ CLIL(Content and Language Integrated Learning)とは

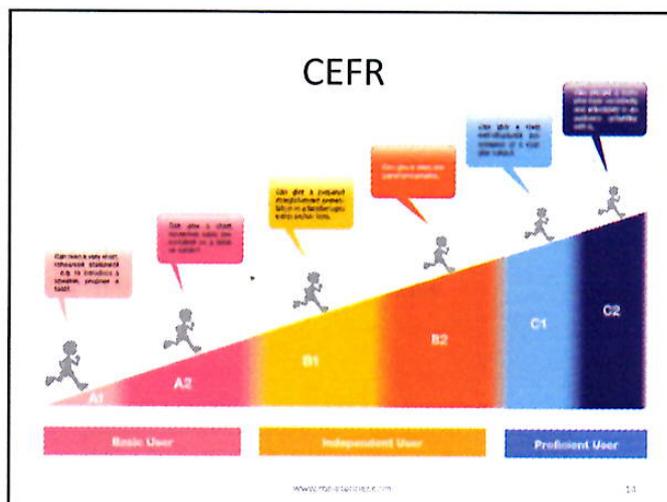
英語という独立した教科として学習していくことより、他教科や新聞など別の媒体を利用し、4 技能を統合的に学習しようとする、ヨーロッパを中心に進められつつある内容言語統合型学習のことをいう。主に 4Cs(Content, Communication, Cognition and Culture)の 4 観点に重点を置きながら学習展開を考えており、この 4 観点のバランスを保ちながら一つの授業を作り上げることを目指す。

・ Hard and Soft CLIL

CLIL を使った授業展開を考えたときに、生徒にどのような活動を取り入れながら学習をさせるのが鍵となり、教科書を教えるだけでなく、教科書で学習する単語や題材を利用しながら、英語の学習レベルをコントロールしていく必要がある。英語の学習能力は LOTS(lower order thinking skills)と HOTS(Higher order thinking skills)に分けられ、LOTS と判断されるものには、単に英単語を暗記したり教科書などの英文を読み上げるだけになったりすることを指す。学習した単語を使用して自分の考えを英文にまとめるなど、創造性のあるものは HOTS と判断される。英語学習者の学習レベルを HOTS に引き上げるためには、学習者の次のレベルまたは少し上のレベルの学習内容をインプットしていく必要がある。多方面にインプットしていくには、視聴覚教材などを利用し、言語だけの学習にしないようにすることも求められる。それにより、多様なアウトプットの方法・機会へとつながる。

・ The CEFR(Common European Framework of Reference)

ヨーロッパ言語共通参照枠として The CEFR という基準表がある。A 群から C 群の 3 つの枠に振り分けられ、A 群から「基本言語使用者」「独立言語使用者」「熟達言語使用者」と位置づけられる。日本の英語教育を受けてきた学習者の多くは A2 ランクと考えられることが多く、ある程度の単語や文法は覚えられるものの、それらを使用して自己表現をすることに欠けていると見なされる。



- ・ CLIL を使った活動例

→ CLIL collocations

クラス内で、一人につき一枚、熟語やイディオム、もしくは略語などの一部が書かれているカードを配る。そして、自分もっているカードと語のつながりがあるカードを持つ生徒を探し、ペアを作る。

The CLIL ball

一定のグループ内でお互いの顔が見えるように、輪のように広がる。数字が書かれたボールを輪の中にいる生徒（誰か）に向かって投げる。ボールが飛んできた生徒は、自分の正面に見えた数字と同じ項目の質問内容に対して英語で答える。質問に答えたら、また、ボールを誰かに投げて、質問を繰り返す。

(2) ワークショップ 2 検定教科書(New Crown3)を使用した CLIL の授業の紹介

- ・ 帯活動

スピーキングの場を設ける。メモとしての情報を活用し、自らの言葉に代えてコミュニケーション活動を行う。→ **Activating postcards** (メモをもとに英語表現をする。)

- ・ 新出単語を学習

単語、形を覚えるだけではなく、使うことを考えた活動を行う。
→ **loop game** (意味から単語を推測させる。)

- ・ 教科書の本文の学習

本文と同じ題材になる動画や写真など、本物を見せる。視覚的情報と聴覚的情報をもとに質問に答える→ **TF question** (本文の内容を見たり聞いたりして、その後、その説明となる英文が正しいかそうでないかを判断する。)

(3) ワークショップ 3 CLIL の実践 (応用)

- ・ ペアにて演習

T F question の作成

- ・ 質疑応答

応用を考えた授業展開が求められるが、学習レベルが追いつかない生徒も大勢いることが予想される。

4 感想

今回の研修を通して、言語学的観点から英語の授業展開について考えたことと、新学習指導要領における「主体的・対話的な深い学び (アクティブ・ラーニング)」に通ずるものがあると感じられた。一つの言語活動に固執せず、多角的な活動にするには語彙力や文法の知識など基礎力が問われる。The CEFR のレベルが A 2 と判断されるのであれば、現在の英語教育で取り入れられているペア学習やグループ学習、自己表現活動を継続していくことで、現状は改善されるはずである。また、現行の英語の教科書は以前までの内容構成に加え活動をしやすいように工夫が重ねられている。一方でそれらの内容を行うことだけに注意が払われることもあり、CLIL の考え方を取り入れ、教科書の指導内容を吟味し、より深く理解させ活動できる英語学習にしていく必要がある。日本の学習指導と海外の学習指導のそれぞれの良いところを厳選し、研修した内容を踏まえて授業改善に努めていく所存である。